

Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫茂美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 サノバビル 5.6F

03-3359-7611 (TEL) 03-3355-1462 (FAX)

<http://www.genken.ac>

jimukyoku@genken.ac

責任編集 金瀬 胖

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。

WINTER 2023・2.17 NO.12 「全校写真を見る会」紹介号



「What's Going On」 金瀬胖 2023・1

「写真を見る会」

現研で多様なクラスが作られるようになり、「他のクラスの人の写真が見たい」という声上がり、私も、多くの講師もそのようにおもっていたので「写真を見る会」をはじめた。コロナのために開催を控えたこともあるが今年は多くの方が参加して久しぶりに楽しかった。吉久保さんがテーブルいっぱいに写真を広げていた。生物やよく分からない物体、デジタルアートのようなものなど普通の写真の分類では読解な写真の山であった。しかし1枚、1枚の写真はそれぞれ不思議な「力」があった。

それで生物を並べてみたら、誕生と死の渦を見る感じがした。近頃、体調が悪いので生と死に敏感になっていたからかもしれないが、写真は撮る人のインパクトがあってはじめて人に何かを想起させたりするものだ。J・アガンベンの後継とされる哲学者、E・コッチャが最近「メタモルフォーゼの哲学」という本を書いた。少し長いがこの写真の読解のヒントになるだろうから引用する。「あらゆる生きものは、自分の行動のすべてにおいて世界全体を反映する能力、惑星全体のイメージとなり、それを保持する能力にほかならない。わたしたちが全体を見出すために、グローバル化は必要ない。それぞれの生きものの中心には、全事物を見る視野がある。そしてこの視野、この全体性は、事物のそれではなく、可能な生のそれである。それは世界が自分の家を再発見できるようにする仕方なのだ。地球という惑星はメタモルフォーゼの生、生きとし生けるものの漂流にほかならない」吉久保さんは「サンサーラ」輪廻という。それはコッチャの哲学を一言で表しているが、輪廻はコッチャの哲学で理解したほうが世界を見るのがおもしろいように私は思う。 金瀬胖教務主任

contents

吉久保和子

木崎昭

高群美子

原田敏朗

高山尚人

中澤ふみ子

松原恵子

英伸三

飯塚明夫

三枝道夫

五味明憲

生田一美

尾辻弥寿雄

金井紀光

山本やす子

写真集「MINDSCAPE in the woods」を読む



尾辻ゼミ

吉久保和子 サンサーラ 《輪廻》

全校写真を見る会に初めて参加しました。今まで撮りためていた写真を3～40枚持参。先生方が2枚、3枚と並べて下さった。生命と死、死と変容の話がされた。そして最後にこの3枚、これが良いと。私の拙い写真の中に、輪廻が見えた。



日曜撮影専科

木崎昭 日本海 由良

昨年末現研ゼミの東北撮影旅行で山形の由良で温泉に浸かった。

翌朝早朝激しい海鳴りで飛び起きたところ、前日までの快晴が打って変わって窓の外には風雨轟く日本海が現出していた。

由良はもともと漁村だが、漁港のはずれにところどころ朽ちた建物が幾つも残ったままになっている。



デジタル研究科3

高群美子 初冬

冷たい朝、霧と霜の中に浮かぶ光景、東京では見られない日常とは別の世界に入り込んだ。
音はなくキーンとした空気が流れていた。



総合科・デジタル研究科 4

原田敏朗

少し眠そうな、おだやかな町

多摩ニュータウンは、開発から半世紀が経ち、少し眠そうな、おだやかな町になってきた。駐車場脇のテントから覗くヤギ、乳児を抱き椅子で休む女性、線路脇の道をゆっくりやって来る男性。今日も散歩日和だ。

日曜撮影専科

高山尚人 馬の気持ち

乗馬クラブにいる馬は、いろいろな人間を乗せ、時には試合にも出ます。

人間と同じように状況に応じて気持ちが変わり表情も変わります。そんな馬の気持ちを写しました





日曜撮影専科
中澤ふみ子「街光線」

陽ざしは冴え冴えとしていた。見慣れた場所でもいつもと違う光景が見える。
小さなカメラでありふれた日常風景の断片を日記のように撮っている。



デジタル基礎講座

松原恵子 鯉の花見

30年振りに訪れた上野不忍池。

高いビルが建ち、蓮池の周りの木立も成長し、空が狭くなったと感じました。池を覆い尽くすほどの蓮は、野性的でありながら、蕾も花も美しくエレガント。歩いていると、池の中がざわつき、鯉たちが集まってきました。

鯉の花見の宴会が始まりかな？



所長
英伸三

金沢・茶屋町（上）

江戸後期の文政年間に建てられたという贅沢な造りのお茶屋の建物が並ぶ主計町の裏通りに、トタン板の家壁にベンガラを塗った粋な民家があった。

日本海・内灘（下）

1952年、日本海を含めて砂丘知来を米軍試射場に接收され、反対闘争が展開された。現在はウインド・サーフィンを楽しむ人たちが賑わっている。



隅田川ークロニクル# 3
2011 年 2 月 14 日 13 時 50 分 30 秒

撮影：飯塚明夫
(ゼミ・土曜ゼミ 講師)

「クロニクル」は年代記・記録・物語の意味
「撮影の時刻」、「隅田川の景観の記録」、「岸辺で人びとが心に刻む小さな物語



金井ゼミ
三枝道夫 「川の音、鉄の匂い」





土曜ゼミ・モノクロ暗室専科 講師

五味明憲 「南予、祭り音（ね）の里」



尾辻ゼミ

生田一美「通学路」

一心に本を読んでいる少女の立ち姿に心惹かれ、数枚撮っていました。背景が付まいと合わない、背景を消す。このエピソードにH講師は差し替え「通学路」！とおっしゃいました。成る程とすっきりした。「全校の写真を見る会」で学んだ1コマです。



総合科・ゼミ講師

尾辻弥寿雄 「街景」

東京には特徴的な雰囲気を持つ街が数多くある。渋谷は100年に一度という大変貌の真っ最中で、確かこの方角だと記憶をたどり歩いていくと迷子になる、とんでもない街である。逆に上野、特にアメ横あたりはいつに行ってもアメ横である。どちらがいいのかわからないが、それぞれの街景が楽しい。 撮影 2022年11月 上野と渋谷



ゼミ講師
金井紀光 「フクシマ景」 撮影 2022 年 3 月 11 日



ゼミ講師
山本やす子 街道沿いの晩秋

山形県は名のとおり山々に囲まれ山越えして隣町へ。
秋は山が美しく輝くが冬將軍の到来も早いので雪囲いなどに忙しい。
各家々はふゆの保存食、漬物にする白菜や大根、高菜と似た菜っ葉セイサイを
適度に太陽にさらし水分を調節する。茄子も里芋の茎も干され雪国ならの保存食は豊かだ。
ガードレールにずらりと干された菜っ葉たちの姿も美しく尋ねるのが楽しい。



越えられない谷戸最深部 人間市大谷戸湿地 2019・2

写真集を読む——金瀬胖

『MINDSCAPE in the woods

著書の高橋美保さんの写真は「視点」などで見ておられると思う。2015 年以来撮っている狭山丘陵の写真を本として現研出版局から上梓された。素晴らしい本なのでぜひ皆様にみていただき。書評は『写真リアリズム 295 号』に書く予定なのでここでは紹介にとどめる。それにはご自身の本文によるのがいいだろう。なかでもコロナ禍での撮影行で生まれた写真と風景観は一読に値する。

「場所が送ってくれるサインを感じ取り、土を踏みしめ、植物の発する湿り気、木々を揺らす風の音 小鳥のさえずりを聴いていると、野原でも茂みでも深い森の中でも、全体の動きで支配される世界システムがあるように感じる。ひっそりと目立たない水たまりで小鳥が、この世の楽園のように水浴びをしている。そのとき突然、黒い雲が沸き起こり、風に乗って猛禽が姿を現す。すると小鳥のさえずりが止んで息をひそめている様子である。大きな鳥がどこかへ去っていくと、風が勢いを増し、樹々の命は繋がっているという原初的な実感がする。」(P3-4)

「コロナ禍により一時、狭山丘陵に立ち入る人が少なくなったので、荒廃がすすむ一方で、動植物が人目に触れないところで、自由を満喫して競争をしているような場面が見られた。2020 年位まで、湿地のカエルが増え、ササ林のクモも一時、急増したが、また最近は全く見かけなくなったりして、増減は

武蔵野・狭山丘陵』高橋美保

不安定である。しかし一貫して、集中豪雨、強風で倒木が増えて、雑木林がまばらになると、一時的に地衣類が増えたとしても、日照が良くなることによって湿地が乾燥して草原部分が増加する傾向がみられる。丘陵の潤いが減って、乾燥した谷戸とまばらな林が目立ってきている。また、コロナ禍と平仄を合わせるかのように森林を襲ったコナラ病が雑木林の代表的なコナラ、クヌギなどの数を激減させている。その結果、野草、苔・キノコ類、昆虫、野鳥の姿も見る機会が減っている。」(110P)

著書の写真と風景観がよく伝わる写真をあげておく。

p 1「垂れ下がったカズラ」 p14「ツタとせめぎ合い・・・」
p 26 - 27「上方を目指して、三つ巴の絡み合い」 p 48「光るヌカキビの実」 p59「ヒバカリの子ども」 p106「ツタの覆いを撥ね退ける」など。タイトルの MIND はよくある my mind ではなくて mind of woods であることがわかる。

人の動作、感覚、記録、伝達が PC に依存するようになり、その便利さと引き換えに、感覚、現実と人間の一瞬の閃光のような交差、その背景の微細な雰囲気などを失い、ディスプレイで映像果実だけを見せられている今日。紙面を捲り、接触し、作者と現場の魂の振動を感じるのはすぐれたプリントと本。全身で写真と応答し、ただ見るのではなく受肉する。写真集とはいまだ他に変わるものはない。